地質ニュース588号，61－69頁，2003年8月
Chishitsu News no.588, p.61－69, August, 2003

石の俗称

みちのく石便り（その1）

加　藤　碩　一[1)]

最初から私事で恐縮ですが，杜の都仙台に転勤したのを契機に，単身赴任の特権（休日には自分のことだけを考えれば良い．家族のための掃除・洗濯・炊事・買い物・女房の肩揉み・給仕など家族サービス等々家事一切からの解放．いくら飲んでも文句を言われない）を最大限に生かして，みちのく一人旅を楽しみつつ東北地方の石を経巡ってみようと思います．しばしおつきあいの程を．まずは，身近な宮城県から始めましょう（第1図）．

1．松島や　ああ松島や　松島や

なんといっても，宮城県といえば（産総研東北センターといえるようにがんばりますが），日本三景の1つである松島が全国ブランドの有名な景勝地であることは論を待たないでしょう．江戸時代初期の儒者で官学としての朱子学を確立した林羅山が，「天橋立」「安芸の宮島」とともに日本三景（日本三処の奇観）と讃えたことに由来するなどということはご存知ですよね．江戸前期の俳人，松尾芭蕉も元禄二（1689）年，「奥の細道」の途次立ち寄り「扶桑第一の好風」と感嘆した名所です（古代中国で日本のことを「扶桑」と呼びました）．このあたりは，新第三紀前期中新世の松島湾層群が分布しています．本層群は，5層に細分され，下位の塩竈層・佐浦町層は，火山岩・火砕岩からなる陸成層ですが，上位の網尻層・松島層・大塚層は砕屑岩を主とし酸性凝灰岩を挟む海成層となっています．これらは整合関係にあり，松島地域が陸地から海域に変化（沈降）していったことがわかります．詳しい地質を知りたい方は，5万分の1地質図幅「松島」（石井ほか，1982）をご覧ください．松島湾層群から産する軽石質凝灰岩－凝灰角礫岩は，付近の地名を取って「松島石」・「野蒜石（のびるいし）」と称される石材で，有名な栃木県産の「大谷石」と同類です．後述する「秋保石」もやや時代が新しいのですが（後期中新世）同様な石材です．

さて，松島観光のハイライトである遊覧船で見られる大小の島々は主に前述の松島層の軽石凝灰岩からなっています．河川による浸食地形が沈降し

第1図　仙台周辺の位置図．

第2図　松島湾の定期遊覧船案内図．

1）産総研 東北センター

キーワード：松島石，磊々峡，壺の碑，伏石，沖の石，七つ石，巻石

写真1　松島湾の鯨島(右側)と亀島(左側).

てできたものです．その数は俗に808といいますが，これは嘘800で実際には260余りだそうです．と，書くとまことに味気ありません．芭蕉に書かせると「島々の数を尽くして，そばだつものは天を指さし，ふすものは波に匍匐ふ．あるは二重に重なり三重に畳みて，左にわかれ右につらなる．負へるあり抱けるあり，児孫愛すがごとし」(奥の細道)となります(第2図)．この中の双子島といわれるのが写真1ですが，右側の平べったいのが別名「鯨島」，左側が「亀島」とも呼ばれているそうです．亀石(岩)や鯨石(岩)についてはすでに本欄で，「亀と石」(加藤・遠藤，2001)及び「巨獣と石(その2)」(加藤・遠藤，2003)として紹介してありますので，興味のある方は(ない方も)ご一読ください．

2. 仙台の奥座敷−秋保温泉

筆者の住む陋屋(ろうおく)には，座敷と呼べるような部屋はなく，まして奥座敷などありませんが，仙台にはあります(もちろん比喩的な意味ですが)．それが仙台駅から西に各駅停車バスで50分ほども行くと着く全国的に有名な秋保温泉です．秋保温泉は，第四紀の火山活動に由来する火山性温泉の1つで自然湧出する高温の食塩泉です．

このあたりに分布する地層は，後期中新世の秋保層群で，下位から湯元層・梨野層及び指交関係にある三滝層と白沢層が重なります．湯元層と梨野層の間は不整合です．全体に淡灰青色の石英安山岩質(デイサイト)の軽石凝灰岩が卓越し「秋保石」と称され，耐火性に優れ加工が容易なため石材・建築用材として利用されています．三滝層中

写真2　磊々峡の「奇面巌」(宮城県).

の溶岩のK-Ar年代はざっと800万年前を示しています．温帯性落葉広葉樹の植物化石群を産出し，当時の古気候を推定させます．

さて，温泉に至る手前の川にかかる「覗き橋」の袂から渓谷に入る遊歩道が整備されています．ここを中心にした上下約1kmの渓谷は，夏目漱石門下の独文学者である小宮豊隆によって昭和六(1931)年に「磊々峡(らいらいきょう)」と命名されました．「磊」は石がごろごろしている様を表しています．「磊々峡遊歩道案内」によれば，滝や巌など12箇所の見所がありますが，そのうち石に関係するところを次にご紹介しましょう．もちろんこの渓谷も秋保層群からなります．

「鬼面人を威す」という物言いがあります．「うわべだけの威勢で人を威す」の意で，私たちの周囲にもまた○○族とかいう類の人種にもよく見られます．「自戒しろ」という声も聞こえますが，それはともかく，ここでは「奇面」という造語の話に移りましょう．写真2は，「奇面巌(きめんがん)」と名づけられた岩塊というか岩崖の一部です．なんとなく巨大で奇妙な人面(横顔)に見えますね．これを称しているのでしょう．もっとも化粧を落としたスッピンの家内の顔を見慣れている筆者には取り立てて「奇面」というほどにも見えませんが(アワワ・・)．

次に訪れるのは，「八間巌(はちけんいわ)」です．高さが八間とか幅が八間とかいうことからでしょう．あんまり面白

写真3　磊々峡の「猪飛(跳)巌」(宮城県).

写真4　護王神社の「狛猪」(?)(京都府).

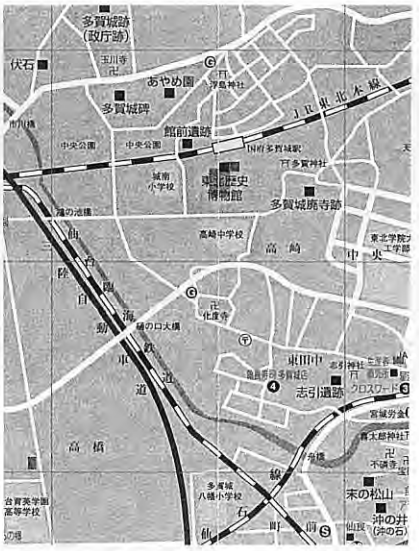
味のないそのまんまの名称です.「松島は八百八島」式に「百間岩」とか「千間岩」とか言ってもらいたいものです. つまらないので写真は省略します.

さてその次に控えしが,「猪飛(ししとび)(跳)巌(いわ)」です. もちろん猪がヒラヒラと空を飛ぶのではなく, 猪突猛進して急崖を駆け下る様を言い表したのでしょうか. 現地で見ても写真で見ても上から見ても下から見てもどこが猪なのかよくわかりませんね. 要するに崖の侵食地形です(写真3). それとも「しし」は「かもしか」を意味し, この岩をかもしかが登り下りしたことに由来するのでしょうか. 動物になぞらえた石・岩はそれこそたくさんあり, すでに本欄でも紹介してきたところです. 筆者が共編集した「石の俗称事典」(加藤・遠藤, 1999)でも触れたように, 猪の名がつく自然石は知られておらずこれは珍しい事例です. 猪そのものは, 縄文時代の一種の土偶にも象られているくらいです. 例えば, JR東北本線「国府多賀城駅」に隣接する「東北歴史博物館」にも展示されています. また, 京都の御所の西側にある護王神社はいのししのコレクションで有名です. なんと狛犬の代わりに狛猪(?)があるのです. みちのくのものではありませんが, 面白いのでついでに写真を掲載しておきます(写真4). 猪は, 畑を荒らす害獣として「山鯨」の異称をもち, その肉は「ボタン鍋」として膾炙されており, 古来より馴染み深い動物なのに石の名前に見当たらなかったのは「なんでだろ～なんでだろ～」というわけです. ついでに受け売りすると, 猪の肉をボタンと俗称するのは, 本来は「牡丹に唐獅子」のモチーフにある獅子が猪の古名である「シシ」と音通することから来ているそうです. 花札の「牡丹に猪」の図柄はよく知られています. 鍋に供する猪肉をボタンの花の形に盛り付けるのは料理人の工夫なのでしょう.

写真5　磊々峡の「天斧巌」(宮城県).

さて, どんじりに控えしは,「天斧巌(てんおのいわ)」です. 写真5に見られるように, 崩落した岩塊が節理面で解離して両断されたようになっています. この形を巨大な斧(の頭部)とみなして天斧と称したのでしょうか. それとも, あたかも天界からの斧で断ち割られたような姿が名前の由来なのでしょうか. 第二次大戦中に秋保温泉に疎開していた仙台生まれの明治

写真6　磊々峡を望む(覗橋から)(宮城県).



第3図　多賀城付近の位置図. 仙台市観光協会パンフレットより.

新体詩の代表的詩人である土井晩翠(「荒城の月」の作詞者)は,「磊々峡」を訪れて

「見下ろせば藍をたたうる深き淵　鎮魂台を風掠め行く

真二つに天斧をつんざきぬ　三万年前のあけぼの」と詠んでいます.

こう書くと, まだ訪れたことのない人は, 人跡未踏の断崖絶壁が連なる秘境のように思えるかもしれませんが(写真6), 実態は昔は知らず現在では, 崖の際まで, 旅館・ホテルが押し寄せており, だいぶ風情がそがれます. まあ一度は行って見てください.

3. 多賀城周辺

学生時代に歴史の授業で習ったように, 神亀元(724)年多賀城に国府が築かれ(現宮城県多賀城市), 以後奈良・平安時代には「遠の朝廷(とおのみかど)」と呼ばれた東北地方経営の要でした. 歴史上の有名人とも関わりが深く, 万葉後期を代表する奈良時代の歌人, 大伴家持は68歳でここで没し, 坂上田村麻呂もここに赴任しました. 最寄駅はJR東北本線「国府多賀城駅」です(第3図). その後多くの著名人が訪れています. かの平安末期の歌人である西行法師が「陸奥の奥　ゆかしくぞ　おもほゆる　壺の碑そとの浜風」(山家集)と詠んでいます. 芭蕉も「奥の細道」の途次に元禄二(1689)年多賀城に来ました. 近年でも, 正岡子規が, 芭蕉200回忌にあたる明治二十六(1893)年に病身をおしてここを訪れて俳句を詠んでいます. さらに, 明治時代の文部省中学唱歌に「壺の碑」があります. その一節に,「海は田となり　田は海と　うつりかはりし　世の中をひとり静かに　みちのくの　つぼのいしぶみ　苔深し」とあります. この歌詞は, 筆者の独断によれば「奥の細道」のつぼの石ぶみの項に「山崩れ川流れて道あらたまり, 石は埋もれて土にかくれ, 木は老いて若木にかはれば, 時移り代変じて其の跡たしかならぬ事のみを」とあることを受けて換骨奪胎して作詞されたものでしょう. さて, 筆者も平成十五(2003)年卯月, 仙台赴任時に当地を訪れこの雑文を記している訳ですが, これは歴史には残らないでしょう. それはともあれ, 筆者が多賀城を訪れた理由は, 別に遺跡が見たかったわけでもなく, カラオケを歌いたかったわけでもありません. 知る人ぞ知り(最も国重要文化財ですが), 上述のように歌にうたわれた「壺(つぼ)の碑(いしぶみ)」(多賀城碑)そのものを見るためです(第4図).

江戸時代初期に仙台藩がこの石碑(高さ196cm, 幅92cm)を地中から発見し, 世に名高い「壺の碑」であるとしましたが, 明確な根拠がなく明治時代以降真贋論争が起こりましたが, 現在では一応決着がつき平成10年に国の重要文化財に指定されまし

第4図　多賀城碑見取り図(安倍・平川編著, 1999).

写真8　多賀城の「壺碑」(宮城県).

写真7　多賀城の「壺碑」を覆う「鞘堂」(宮城県).

た. ここで実は「つぼ」という意味はよくわかっていません. また,「いしぶみ」も「文」と誤解釈して多くの歌に用いられているありさまです.

保存のため, 写真7のように小屋掛け(鞘堂)されており, 砂岩塊の1面を磨き上げた碑面の全面は見にくいのですが(写真8), 上述の「東北歴史博物館」に実物大の立派なレプリカがあるのでそれを見てください. これは, 奈良時代(762年)に建立され, 碑文に「多賀城　京を去る一千五百里・・・」と141文字にわたって地理的な位置関係や多賀城創建を記したもので, 日本三古碑の1つなのです. ちなみに, 後の2つは, 栃木県の「那須国造碑」と群馬県の「多胡碑」です.

さて, この碑石について岩石学的な検討はすでになされています(永広, 1999). それによると, 岩質は, 細−中粒のアルコース砂岩です. 花崗(質)砂岩ともいい石英・長石を多量に含むもので, 花崗岩や正片麻岩の機械的風化によって供給された砕屑物に由来します. 碑の周辺に同様な岩塊が点在し, それらと比較検討するとおそらく球状風化による残留巨礫と思われ, その供給源の砂岩層の厚さは2m程度あったことになります. 鏡下での薄片観察では, 構成粒子の円摩度は低く中程度の分級度を持ち, 石英, 斜長石, カリ長石の順に多く, その他各種岩片も含みます. 基質は, 12−14%程度でかなりな再結晶白雲母が含まれています. 肉眼で見ても, 先新第三系であることはすぐわかりますが, 供給源の岩層はよくわかりません. 直接的には現地に残留巨礫として存在した砂岩礫を利用した可能性が高いようです.

さて, 青森県にも「つぼのいしぶみ」があるそうです. JR野辺地駅から車で10分ほどの東北町坪渡で昭和二十四(1949)年に発見された「日本中央」という文字が彫りこまれた岩塊「日本中央碑(ひのもとちゅうおうひ)」のことです. 平安時代に坂上田村麻呂が朝廷の威信を示すため刻ませたとか, あるいは弓筈(ゆはず)で文字を記したとかいわれているそうです. 現在では, 日本中央の碑歴史公園の保存館に所蔵されています. 藤原清輔朝臣の歌に「石ぶみや　つがろ(津軽)のをちにありときく　えぞ世の中を思いはなれる」とあ

写真9　多賀城の「後村上天皇御坐之處」碑(宮城県).

り，東北地方北部にあったのではないか(つまり，宮城の多賀城碑ではなくこちらが本物である)という人もいますが，この歌自体伝承伝聞によるものなので，これはひいきの引き倒しではないでしょうか．当地にある「壺の碑」伝説を伝える千曳神社のいい伝えによると碑は坂上田村麻呂以前に神が建てた「鬼やらい」の結界石であるともいいます．「壺」はこの地の古名「都母」が転化したともいいます．同神社の縁起にかかわる「千引の石」が「坪石文」と結びついたという説もあります．はたして，どんな関係なのでしょうか．謎は残ります．

さて，政庁跡の北西端に石碑が2つあります．向かって左は「後村上天皇御座之処」と粘板岩の板石に記されています(写真9)．この石碑の台石は，2mほどの長径を持ち塊状でかなり表面が風化しており，不明瞭な葉理が見える砂岩のようです．しかし，安山岩も風化するとこんな感じになることがあるので即断は避けます．割って新鮮な面を見れば一目瞭然なのですが，あいにくハンマーを持ってきませんでした．この次の機会にお預けしておきましょう(もちろんそんな非常識なことをするつもりはありません．冗談です．冗談ですってば)．これは広義の「腰掛石」です．後村上天皇が，この場所を訪れたことはあってもこの台石に座った証拠などなく，全国的にある「腰掛石」と同様作り話に近いものです．しかし，この石はガイドブックにはのっていなかったので(普通の人はそんな石に興味をもたないのでしょう)，筆者としてはもうけものという感じです．書き忘れましたが，右側の石碑は明治天皇の行幸を記したものです．

写真10　多賀城西方の「伏石」(宮城県).

さて，多賀城碑の西方に「伏石」というのがあります(第3図，写真10)．弘安十(1289)年の銘が刻まれており，多賀城市内でもっとも古い供養碑で，市の指定文化財になっています．古くから旧塩釜街道の路傍に伏せて置かれていたので「伏石」と呼ばれているそうです．これは時宗の僧であった西阿弥陀仏が30余人の協力のもとに建立したとのことです．昔，この石を起こして立てたところこの地に疫病が流行し，占ってみると石を起こしたのが原因だというので元通りに伏せておいたことに由来するといいます．よくある「さわらぬ神にたたりなし」です．石そのものは，多賀城碑同様砂岩残留巨礫を利用したものです．

さて，この南方にJR仙石線「多賀城駅」があり，その南西方に2つの有名な歌枕があります．いうまでもありませんが，おせっかいでいいますと歌枕で寝ることはできません．本来は，歌人が実際に現地で名所の印象を歌に取り入れたものですが，後世になると「本歌取り」され，行ったわけでもないのに(後述するように他人のことはいえませんが)，その印象を多くの歌人が自分の歌に取り入れるようになりました．こうしたものを歌枕と称するのです．エッヘン(何をえらそうに)．さて，その1つが「末の松山」(写真11)です．たとえば，小倉百人一首にも収められている「ちぎりきな　かたみにそでを　しぼりつつ　すゑのまつ山　なみこさじとは」(後拾遺集，清原元輔)が有名です．さて，岩手県

写真11　多賀城南方の歌枕「末の松山」(宮城県).

にも「末の松山」があるそうです．二戸市と一戸市を結ぶ旧国道にあり，両者の境界をなす浪打峠(標高302m)付近は浅海成の新第三紀中期中新世末の松山層の粗粒砂岩が分布しており，地層中に発達する斜交層理(クロスベッディング)が美しい縞模様を描き国の天然記念物とされています．一部安山岩質火砕岩を挟んでおり，K-Ar年代は約1,510万年前を示しております．近傍に松の生えた小丘状の地形があり，これがどういうわけか別名「末の松山」とよばれているのです．しかし歌枕の本家本元は宮城県のようです．現在では，商魂逞しく松山の一部を削り取るような感じがするほどま近くまで墓地が迫っています．平安歌人や芭蕉が見たらさぞ嘆くでしょう．しかしこれは今日に始まったことでもなく，「奥の細道」でも「松のあひあひ皆墓はらにて」とあります．

もう1つが本題の「沖の石」ですが，これについてはすでに紹介しました(加藤，1999)．そのときは実際に現地に行って見たわけではありませんので，ここで若干補足いたします(写真12)．これは，中生代中期三畳紀の利府層の節理が発達した粘板岩(スレート)塊です．周りを小さな池に囲まれています．というよりも芭蕉に同行した曾良の日記に寄ればこれは「沖の井」で，「沖の石」は，別にあったが，当時でも所在不明というか消滅したのだともいいます．芭蕉自身は「奥の細道」に「それより野田の

写真12　多賀城南方の歌枕「沖の井」(宮城県).

玉川・沖の石を尋ぬ」としか書いてありません．往時はさぞ風情のあったことでしょうが，今はなんということもなく地質学的にもどうということはありません．千載集・小倉百人一首に収められている源三位頼政の娘二条院讃岐姫が詠んだ歌「わが袖は潮干に見えぬ　沖の石の　人こそ知らね　乾く間ぞなき(間もなし)」で有名です．さて，福井県小浜市北東部の，獅子ヶ崎西方，約5kmの海上に浮かぶ大きな暗礁が本来の「沖の石」だといいます．二条院讃岐姫がこのあたりに流された折に，かの歌を詠んだというのです．彼女はこの浦の明神崎から身を投げたそうで，ここに「往生岩」「釣姫明神」「釣姫の墓石」まであるそうです．ここまでくるとあらゆるものに本家争いがありそうです．ついでに，脱線すると，滋賀県彦根市に属し琵琶湖上に浮かぶ多景島(後期白亜紀−古第三紀の比良花崗岩に属する黒雲母花崗岩からなる)のさらに西方約4kmに4つの岩からなる「沖の白石」(後期白亜紀−古第三紀の湖東流紋岩類に属する荒神山溶結凝灰岩の(角閃石)黒雲母流紋岩溶結凝灰岩からなる)があります．これは鵜などの水鳥の糞で白く見えるためだそうです．さらに，福井県丹生郡越前町の越前岬北方の日本海上に突き出た断崖部がやはり海鵜などの糞で白く見えるのですが，その名が「鳥糞岩(とりくそいわ)」というのはあんまりですね．

4. あやしい「鳴合峡」の「七つ石」

仙台と西の山形をつなぐ仙山線沿いに作並街道が走り，ものの本によると，広瀬川が狭隘な山間部を抜け，作並方面から東へ流下して郷六盆地へと

写真13　広瀬川「鳴合峡」(宮城県).

写真14　石巻の「袖の渡り」(宮城県).

流入する渓谷部は「鳴合峡」と称される景勝の地であり，江戸時代初期には，かの伊達政宗が釣りを楽しんだという言い伝えもあるそうです．ここには「七つ石」と呼ばれる巨岩が横たわり見事な景観をなすそうです．「七つ石」とは，相逢石・松茸石・鞍掛石・臥牛石・起駒石・ミミズク石・畳石だそうで，これはぜひとも見ねばなるまいといさんで，まず最寄のJR仙山線の「愛子駅」(「あやしえき」と読みます)に降り立ちました．この駅は昭和四(1929)年9月仙山線の仙台−愛子間開通時に開業しました．ここで脱線すると(いつものことですが)，「愛子」の地名は「安永風土記書出」によれば，「当村横町と申すところに相立ち申し候子愛観音之有り候を以って当村の名に申し来たり候御座候」とあることによります．つまり子愛観音(こあやしかんのん)の字を入れ替えて「愛子(あやし)」としたとのことです(宮城町誌)．この駅名は愛子内親王御生誕時にもてはやされて切符が売れたことで有名になり，石碑も建立されました．

さて，広瀬川「鳴合峡」付近は，新第三紀鮮新世の仙台層群が分布しています．これは，下位より亀岡層，竜の口層，向山層，大年寺層に区分され，亀岡層と向山層は陸成，他の2層は海成で，つまり陸成から海成の2回の堆積サイクルがあったことになります．とくに，鳴合峡付近は，このうち向山層が分布します．主に砂岩・シルト岩からなり，中部に広瀬川凝灰岩部層を挟みます．このフィッショントラック年代は470万年−530万年前です(北村編，1986)．多分これが侵食されてできたものでしょう．渓谷に架かる「鳴合橋」から「鳴合峡」を望んだのが写真13です．川岸に下りるすべはありません．橋上から覗いてみてもどれが何岩なのか見当もつきません．もちろん看板があるわけでもなく，通りがかりの里人に尋ねてもわかりません．日を改めて，「愛子駅」西隣の「陸前白沢駅」に降り立ち，広瀬川温泉に向かい再度チャレンジしました．しかし，前回と同様何の手がかりも得ることなく，むなしく引き返さなくてはなりませんでした．

「七つ石」探訪の夢破れての帰り道，現代の芭蕉を気取ると，川岸近くに佇まう倒産し閉鎖されたホテルの白い建物群が「つわものどもが夢の跡」をしのばせ，うたた無常感と日本経済の逼塞感を感じさせました．なーんちゃって．

5. 石巻の巻

次に仙台を北東に離れ，石巻市に行って見ましょう．JR仙石線の終点である石巻駅から歩いて15分ほどの旧北上川畔に住吉公園があり，その一角にこれも歌枕である写真14の「袖の渡り」があります．これは，対岸を結ぶ北上川渡船場の跡を整備したものです．言い伝えによれば，源義経が京の鞍馬を逃れ奥州平泉に赴く途中，この川を船で渡る際，船賃代わりに着ていた鎧(よろい)の片袖を与えた故事によるということです．さて，みちのくには関係ありませんが「鎧の袖」というのが兵庫県の香住町にあります．ついでに触れておきましょうか．香住港の北西約4kmの海岸に突き出た高さ約65m，幅200m余りの急傾斜の崖があります．新第三紀鮮新世の安山岩溶岩に縦方向に節理が入り，それらの間の岩脈が節理を水平によぎって鎧の縅のように見えることからなずけられたもので，国指定の天然記念物です．さてさて，本題は写真15のように，

写真15　石巻の「巻石(烏帽子石)」(宮城県).

写真16　石巻の「海石山　壽福寺」(宮城県).

「袖の渡り」の先に川中に露出している岩塊です．これが「巻石」と呼ばれ「石巻」の地名発祥の由来となったものだそうです．「巻石」が最初に記述されたのは天和二(1682)年刊行の「松島眺望集」(大淀三千風著)で,「石巻　川中に大きなる岩あり，このかげ浪巴をなせり」とあるそうです．昔，付近は入り江で，潮の干満に際してこの石の周りで激しく渦を巻いたことによるそうです．安永二(1773)年の「石巻村風土記御用書出」には「当村端郷住吉町住吉大明神社地わきに，石巻石，石巻渕御座候に付き　その縁をもって尊名に唱え申し候」とあります．諸説あり，今となっては決め手に書ける由来ですが，江戸時代にはこの「巻石」起源説が流布していたようです．

石そのものは中生代三畳紀稲井層群伊里前層の細粒砂岩ないし砂質頁岩です．ほぼ菱形状の岩塊で，水面に対して垂直な面には不明瞭な級化層理が見られ，上面の平坦な面は層理面かもしれません．そうすると走向傾斜はN20E, 15Eといったところでしょう．一部三角錐状の突起が出ており，その形から別名「烏帽子岩」ともいわれています．たとえば，元禄十一(1698)年の「牡鹿郡万御改書上」には「川中　烏帽子石　東西壱間半　南北三尺八寸　ただし石巻石と申し伝え候」とあります．さらに，享保四(1719)年の「奥羽観跡聞老志」には「烏帽子石　住吉社畔華表前の湾に巨石あり．高さ六尺広さ南北三尺東西九尺　その象(かたち)烏帽子に似たり」とあります．ただしこれには異説があって住吉神社の正式名称である「飯石大島神社」の「いびし」がなまって「えぼし」となったといいます．また，羽黒山麓にある海石山寿福寺(写真16)は，以前は大島神社境内にあり,「海石」という山号は[烏帽子石]に因んだものといわれています(以上由来に関わる記述は，石巻市教育委員会と協同組合石巻商店会による現地の説明板の記載によります)．大小さまざまの「烏帽子岩」は全国各地にあり，稿を改めてご紹介しましょう．

今回はこの辺でお開きといたしましょう．

参考文献

永広昌之(1999)：付・石材として見た「多賀城碑」83-88.
安倍辰夫・平川　南編著(1999)：多賀城碑−その謎を解く[増補版]，329p. 雄山閣.
石井武政・柳沢幸夫・山口昇一・寒川　旭・松野久也(1982)：松島地域の地質．地質研究報告(5万分の1地質図幅)，地質調査所，121p.
加藤碩一(1999)：「沖の石」雑考．地質ニュース, no.538, 6.
加藤碩一・遠藤祐二(1999)：石の俗称辞典．愛智出版. 312p.
加藤碩一・遠藤祐二(2001)：「亀と石」．地質ニュース，no.563，61-69.
加藤碩一・遠藤祐二(2003)：「巨獣と石(その2)」．地質ニュース，no.582，57-62.
北村　信編(1986)：新生代東北本州弧，地質資料集，宝文堂.
多賀城市観光協会(2003)：史都・多賀城　浪漫文庫, 25p.

KATO Hirokazu (2003)：Letter about stones from Mitinoku (no.1).

＜受付：2003年6月25日＞